あ と が き

ここに『東南アジア研究』第4号の編集を終える。京都大学東南アジア研究センターの出版計画の実施も順調に進んでおり、6月には所報の第1号が出版されたが、本誌も季刊誌として1周年を迎えるに至った。当研究センターの研究成果はひとえにこの出版計画を通して真価が世に問われるわけだから、定期刊行物としての本誌の使命は特に大きい。今後も少なくとも季刊の継はくずさず、さらに将来は研究センターの発展によっては隔月刊とすることも計画中である。

しかし、われわれは既刊の各号に必らずしも完全に満足しているわけではない。内容・体裁ともまだまだ検討の余地がある。このような雑誌の編集には、旧号の方針をそのまま踏襲する方法もあるけれども、われわれは良いことは可能な限りすべて実行するという基本方針をたてて、改良すべきはすべて改良し採るべき新企画ほどとどし採用することにした。本号でもすでに改められた点が少なくないが、特に次号からはいくつかの新企画を実施する予定である。

本号の内容の主なものは、総論的なもの、言語学的なもの、農業、森林、土地、医学事情にかんするものなどであり、地域としてはタイにかんするものが多いく。本誌はまた、教育の水準を保ちつつ、東南アジアに関心をもつものなら誰でも興味深く読めるということを意図するものであるが、ただしご本号がそれを実現しているかどうか、個人でもあるが、むやみに作るべきことはもちろんないが、やはり再考する余地があったのではないかと反省する。これは編集するものの問題にとどまらず、当研究センターに関係するものの全員がいかにして共通の問題意識をもつかということにかかっている。今後執筆される諸氏にもこの点よく留意されるようお願いしておく。

いつものことながら、本誌のために執筆された諸氏に対して色々と御迷惑をおかけした。とくに前号に掲載予定の西田隆雄氏の論文が本号に、本号に掲載予定の木村健一・羽羽益生田氏の論文が次号にまわされたことは各氏におわび申し上げたい。また、印刷の問題や原稿についての困難な注文や再三にわたる変更をも気やすく引受けいただいた西中印刷舎にはお礼を申しあげる。

東南アジア研究センターの発展にとって大学院生諸君の活動は大いに力強さ。現地調査や留学のほかにHRAFの整理には桂清稀郎君が、所報の編集には荻野和彦君が参加するなど業務面での活動もある。

本号の編集にあたっては、三谷常之君の労を焼かし、編集業務の大半を次号以下の企画などを諸事に参加してもらった。もちろん責任はいっさい諸編集委員が負うものである。

当研究センターの現地調査計画にしたがって現地調査を行なったものが研究例話で発表後必ず寄稿するという原則のほかに、どしとし投稿を歓迎する。論文・報告・図書紹介の別を問わない。ただし、その際、うえに述べたことと本号に掲載した投稿規定は必ず守っていただきたい。次号の原稿締切日は8月10日である。

本誌の発展は東南アジア研究センター自体の発展のひとつのメルクマールであると同時に推進力である。各位の御協力を期待する。もって編集後記にかえる。（編集委員）